

2016年10月6日



一橋大学体育会バレーボール部
第4回海外遠征（台湾）報告書
【詳細版】

文責	4年	主将	宇野宏祐
	2年		栗本寛久

目次

I. 遠征内容	2
概要	3
遠征総括①	5
遠征総括②	6
日程詳細	8
II. 部門別報告	15
(1)交流・討論会部門報告	16
(2)ハイテク産業部門報告	26
(3)歴史文化部門報告	30
III. 班別行動報告	38
IV. 全体感想	44
V. 如水会台湾支部訪問	47
VI. 事前活動	49
VII. 参考資料	51
2016年度海外遠征計画書	52
収支報告書	54
国立台湾大学・一橋大学 交流日程表（一橋用）	55
参加者名簿（一橋大学バレーボール部・国立台湾大学バレーボール部）	57
討論会プレゼンテーション資料①	59
討論会プレゼンテーション資料②	60
一橋大学体育会バレーボール部プレゼンテーション資料	61

I. 遠征内容

～はじめに～

私たち一橋大学体育会バレーボール部は、如水会、およびOBの皆さまのお力をお借りして、2016年8月2日から8月8日まで台湾を訪問、国立台湾大学（以下NTU）と交流をして参りました。バレーボール部にとって今回の海外遠征は4回目でしたが、無事成功することができました。

頂きましたご支援・ご助力に対し御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。今回の海外遠征につき以下の通りご報告申し上げます。

概要

(1)日程〈2016年8月2日～8月8日〉

- 8月2日 羽田発(CI221便)・台北到着
- 8月3日 NTUバレーボール部との交流試合、如水会台湾支部主催夕食会
- 8月4日 NTUバレーボール部との交流試合・討論会・キャンパスツアー・交流夕食会
- 8月5日 台湾Panasonic・MSI (Micro-Star INTL Co LTD) 見学、
交流協会台北事務所訪問
- 8月6日 故宮博物院・国立台湾博物館・中正記念堂見学
- 8月7日 台湾高速鉄道で台南へ、安平古堡・赤嵌楼見学、
国立成功大学キャンパスツアー
- 8月8日 班別自由行動、台北発(CI222便)、日本へ帰国、解散

(2)参加者

体育会バレーボール部 四年生5名、三年生7名、二年生5名、一年生11名、
付添OB1名、
合計29名

氏名詳細は添付の参考資料の通り。

なお、麻植茂OB、安西正嗣OB、吹野博志OB、中島孝OBがNTUとの交流(8月3日、4日)に現地参加。1

(3)交流先

NTU 男子バレーボールチーム

(4)交流試合会場

NTU (No. 1, Section 4, Roosevelt Rd, Da'an District, Taipei City, 台湾 10617) 総合体育館および旧体育館(交流試合)、台大尊賢館 Just Italian (交流夕食会)

(5)宿泊場所

劍潭海外青年活動中心 8月2日～8月5日 (4泊)

住所：No. 16, Section 4, Zhongshan N Rd, Shilin District, Taipei City, 台湾 111

ニューコンチネンタルホテル・タイペイ 8月6日～8月8日 (2泊)

住所：No. 73, Section 1, Chongqing North Road, Taipei, Taiwan

(6)その他、訪問先

台湾 Panasonic (新北市中和区員山路 579 号)

MSI (新北市中和区立德街 69 号)

交流協会台北事務所 (台北市慶城街 28 号通泰商業ビル 1 階)

遠征総括①

文責 3年 山浦 拓

一橋大学バレーボール部の海外遠征はオーストラリア・中国・シンガポールに続き 4 回目となる。全ての遠征において如水会および一橋バレーボールクラブ（OBOG 会）から多くの支援を戴き、回を追うごとに遠征の充実度は高まっている。本遠征では、初期準備段階で海外遠征の意義について部員で議論した。その結果として、今回は「海外遠征を経験した学生が、将来的に社会の第一線で活躍し、支援をしてくださった如水会や OBOG 会に恩返しをするとともに、まだ見ぬ後輩たちには、自分たち以上の経験ができるように支援する」という最終目標を掲げ、実行していった。今回の海外遠征において、それまでの遠征と比較し、特筆すべき点は海外遠征アドバイザー委員会からの助言を参考にして、部員の勉強会を中心とした「部員主体」の遠征であったことである。

海外遠征アドバイザー委員会とは、麻植茂氏、吹野博志氏をはじめとする OBOG が委員となって、学生主導の海外遠征に関し、その経験から有効な助言をする一橋バレーボールクラブの機関である。本遠征においては、実際に遠征を行う約 1 年 4 か月前の 2015 年 4 月に第一回アドバイザー委員会が開催され、その後も数回の委員会の中で、現役遠征担当の遠征計画に対し、助言を与えて戴いた。その結果として、遠征準備は深化し、遠征計画には磨きがかけられた。海外遠征アドバイザー委員会は「部員主体」を掲げた本遠征が独善に陥らないための重要な第三者機関であり、次回の遠征においても是非そういう御指摘を戴きたいと考える。また、当部 OB・S37 年卒の相澤光哉氏のお口添えにより、台北駐日経済代表處のご紹介で、台北の海外学生向け宿泊施設である「劍潭海外青年活動中心」に 4 泊宿泊できたことは、遠征費用の削減につながった。

次に、勉強会を中心とした「部員主体」の遠征についてである。本遠征では、遠征の三本柱である学生交流（特に交流討論会）、企業視察、文化学習についてそれぞれ独立した勉強会班をつくり、部員全員はいずれかの勉強会班に所属した。遠征準備の初期段階（2015 年 9 月～2016 年 5 月）においては、各班で台湾の企業や歴史・文化につき事前調査をして、遠征計画を自ら立案をし、決定した。そして、遠征直前期（2016 年 6 月～7 月）には、毎週土曜日に各班主任の 1 時間から 2 時間程度の勉強会を実施した。班ごとに学習した知識を部員全体に伝えるとともに、担当の勉強会班の班員が習得知識を発表することにより、自らの知識の深化を目的としたこの勉強会は、実際に台北歴史文化見学や台南歴史文化見学において、大いに成果を上げた。台南歴史文化見学では、部員の親戚関係を通じて紹介戴いた国立成功大学歴史学系副教授の陳文松氏に案内役をお願いしたが、事前に学習した知識と陳先生の解説を照らし合わせ、史跡に対する理解を深めることが出来たことは、事前勉強会によるところが大きいと考えられる。討論会においても、事前勉強会の中で模擬討論会を行うことで、本番においても一橋側の学生が議論をリードすることが出来た。さらに、初め

での遠征となる1・2年生を対象に、事前に、前回シンガポール遠征の様子に関して、写真を交えて説明することで、遠征の担当事務局から1・2年生まで、遠征に向けた意識を統一することが出来た。部員の1/3以上が、自発的に夏学期の一般教養科目「台湾の歴史と文化」を受講し、遠征に向けた自主的な事前学習を図ったことは、部員全体の遠征意識の向上の結果と言えるだろう。

遠征準備について述べてきたが、実際の遠征において印象的であったことは、国立台湾大学との交流であった。2日間にわたる交流において、試合や討論会を重ねるごとに、非常に友好を深めることが出来た。最終日の班別自由行動において、国立台湾大学の学生とともに台北の市内見学を行った班があることは、画期的なことであった。来夏にも国立台湾大学が来日する可能性も含め、海外遠征の最終目標である相互交流に向け、今回の国立台湾大学との交流は成功であった。

前述の台南歴史文化見学において、現役の教授の方に案内役をして戴いたことも、幸運であった。オランダ統治時代の史跡である安平古堡や赤嵌楼を、陳先生の解説によって見学することが出来たことは、単なる個人旅行とは異なる、海外遠征ならではの特典であった。

如水会台湾支部主催夕食会では、支部長の松木氏をはじめ、日本人如水会員の方や、台湾人の如水会会員の方々に歓待して戴いた。私は、最年長の馬さんのテーブルであったが、中国と台湾の関係性について中国の思想を交えながら解説して戴き、中国の思想や歴史の学習の重要性を再認識した。海外遠征は、アジアの近隣国との友好関係の向上も目的であるが、日本がアジア諸国と連携していく中で、台湾と中国について学習することは不可欠に思われる。

上記の通り、今回は遠征準備段階に特に力を入れた遠征であったといえる。そして、準備に力を入れた分、現地で得られるものも非常に多かった。本遠征の経験を糧に、「海外遠征を経験した学生が、将来的に社会の第一線で活躍し、支援をしてくださった如水会やOBOG会に恩返しをするとともに、まだ見ぬ後輩たちには、自分たち以上の経験ができるように支援する」という最終目標を達成できるようにしたい。

遠征総括②

文責 3年 裏田 舜脩

一橋大学バレー部における海外遠征は、オーストラリア・中国・シンガポール、そして今回の台湾で4回目となったが、この貴重な機会を無駄にすることのないよう部員が回を重ねるごとに反省と試行錯誤を繰り返していったため、本遠征は学生交流、歴史・文化視察、企業訪問といったあらゆる面でこれまでの遠征の中で最も有意義なものであったと感じる。

その一つが事前勉強会・討論会である。部員が受け身の姿勢で、かつ観光気分で海外に連れて行ってもらおうというのではなく、各々が積極的に学ぶ意欲を高めて欲しいとの思いから、部員を歴史文化研究班・ハイテク産業班・討論会班に分け、大学の講義、OB 講演会、関連書籍等を利用しながら各分野の知識を深め、それを勉強会におけるプレゼンにより部員全員に共有させるという方式をとった。これが、企業や交流協会台北事務所訪問時に多くの質問の手が挙がった一因だと自分は考える。また、やはり関連の知識を持っているか否かは実物を見た時の感動や理解度がまるで違う。本遠征は学生交流やキャンパス、博物館、歴史遺跡の視察が中心というアカデミックな要素の強いもので、日本人旅行客に人気である九份や台北 101 などの訪問は全体行程に組み込まなかったが、部員は一橋大学の学生だからこそできること、バレー部だからこそできることを体験し一層学びを深め、国際感覚を養うという最も重要な経験をできたと思う。

さらに、国立台湾大学との交流も大きな成果を上げることができた。前回の反省ではバレーボール部としてもっと試合を行う時間を増やしたいとの意見が多かったため、本遠征では試合を 2 日間行い、下級生にも出場機会が与えられえるように配慮した。実力は相手の方が格上であったが、拮抗した試合展開となるなどバレー技術向上の面において良い好敵手であった。

討論会では事前に英語勉強や討論テーマ研究を行っていた一橋大学側がリードする形となったが、国立台湾大学側も真剣に討論に参加してくれていた。コミュニケーションはお互い英語のネイティブスピーカーではないため、思考しながらゆっくり丁寧に相手に伝えるという感じでむしろ話しやすかったように思う。夕食会も和やかな雰囲気、多くの部員が連絡先を交換していた。

そして、最大の成果は監督をはじめとして国立台湾大学バレー部がチームとして日本に来る意欲を示してくれたことである。台湾は地理的にも近く、実現可能性は高いだろう。この海外遠征がきっかけとなり、一橋大学バレー部と国立台湾大学バレー部が末永く良好な関係を築けることを期待したい。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった一橋大学バレー部 OBOG 会、如水会をはじめとする大勢の方々にこの場を借りて御礼申し上げたい。そして、本遠征での経験を活かし、立派な社会人となって、まだ見ぬ後輩たちに同じような支援をするという形で恩返しさせていただきたいと思う。

日程詳細

8/2（火曜日） 1日目

12時35分に羽田空港に集合し、日本時間14時35分発のチャイナエアライン221便で台北松山空港へ。台湾時間17時15分に到着。現地ガイドの方と合流、バスにて宿泊先の劍潭海外青年活動中心へ到着。この日は、移動のみで終了。



8/3（水曜日） 2日目

2日目はMRT（地下鉄）にて国立台湾大学へ移動。午前中は旧体育館にて国立台湾大学バレーボール部と交流試合。どちらもレギュラーメンバーで臨み、接戦の末、セットカウント2-3で一橋大学が敗北。午後は新体育館に移動し、両チーム一緒に昼食をとったあと、午後にも交流試合を行った。午後は新人中心での対戦であったが、ここでも一橋大学がセットカウント0-3で完敗。試合後は、MRTにて如水会台湾支部主催夕食会会場の海霸王中山店へ移動。夕食会では、支部長の松木氏をはじめ日籍の会員の方のほか、台籍の如水会員の方も参加され、日台関係や台湾における日本の事業展開についてなどのお話を伺う。こちらからも現地参加された吹野博志OBによる一橋大学のグローバル教育に関する現状報告や、部員各人からの部活動に関する決意表明など、相互に発信し、学生にとつ

て非常に有意義な夕食会となった。



8/4（木曜日） 3日目

3日目も MRT にて国立台湾大学へ移動。午前にはレギュラー戦第2戦を行い、前日同様接戦の末、セットカウント 2-3 で惜敗した。午後は昼食のあと、交流討論会を行った。二つのテーマの「日台関係の今後」と「人工知能との共生」について、5班に分かれ英語による討論を行った。日台両国間の経済交流や、人工知能と共に働く未来について有意義な結論をまとめることが出来た。その後は、国立台湾大学バレーボール部員案内によるキャンパスツアーに参加。校史館では台北帝国大学時代からの国立台湾大学の歴史を学び、図書館なども案内して頂いた。国立台湾大学のキャンパスは、中心を走るヤシの木が植えられた一本道が印象的であるが、校舎建築物は一橋大学の校舎と近似している部分もみられ、日本統治時代の名残と、台湾独自の気候に沿った自然の両面を認識することが出来た。その後は、国立台湾大学に近接した夕食会会場にて交流夕食会が開催され、討論会ではできなかったプライベートな話から、将来のビジョンなどを語り合うなど、両校の友好を深めるとともに、来夏の訪日の意思を確認し、今後に繋がる夕食会となった。



8/5（金曜日） 4日目

4日目はバスにて宿舎を出発。如水会台湾支部支部長の松木氏のお勤め先である台湾 Panasonic を企業見学させて頂いた。台湾大学側からも3名が参加し、一緒に見学した。見学では、林総経理のお話を伺い、企業説明のあと、ショールーム、冷蔵庫の製造ラインなどを見学し、充実したプログラムであった。IoT という世界的な潮流を意識した台湾 Panasonic のレクチャーは、ハイテク産業班が学習した内容と合致する部分があり、事前学習の効果についても再確認した。午後は純台湾企業である msi を訪問した。入れ替わりの激しい業界の中で生き残る経営手法や、現在力を入れているゲームや高速バスなどでのモニター技術など、最先端の技術に触れることが出来た。msi の次は実質の大使館にあたる交流協会台北事務所を訪問させて頂いた。交流協会では沼田代表のご講話を拝聴し、台湾と日本の歴史的關係や、我々に対する激励のお言葉を頂いた。質疑応答も活発なものとなり、部員一同での事前の歴史学習での疑問を解消することが出来た。18時頃に宿舎に戻ったが、夕食は班別の自由行動としたので、多くの者が宿舎近隣の士林夜市へ見学がてら夕食を取りに行った。





8/6（土曜日） 5日目

5日目は、歴史学習ツアーを行った。午前中は故宮博物院で、明清時代からの歴史的・考古学的価値のある芸術品の数々を見学した。一つ一つの芸術品を鑑賞することに加え、中国史を体系的に学ぶエリアでは、大学受験時に学習した歴史との比較など、各々が目的をもって学習に取り組んだ。故宮博物院の次は国立台湾博物館へと移動した。国立台湾博物館は日本統治時代に建設された建築物であり、建物内の原住民や生態系についての展示もさることながら、その建築美は目を見張るものがあった。隣接する 2.28 記念公園も見学することができ、日本統治時代から中国国民党時代に至るまでの歴史的建造物に触れることが出来た。最後は蒋介石総統を記念した中正記念堂を見学した。中正記念堂では、蒋介石総統の人物史や中国国民党政権時代の体制について多くの写真などにより視覚的に理解することが出来た。実際に台湾に赴き、台湾の歴史文化を学ぶにつれて、台湾は想像以上に“中華民国”であり、その文化的な特徴から中華人民共和国とは異なる“正統なる”中国を自認していることと感じた者が少なくない。



8/7（日曜日） 6日目

6日目は、台湾高速鉄道を利用し、台湾南部の港町である台南を訪れた。事前に案内を依頼していた国立成功大学副教授の陳文松教授と合流し、手配バスにてオランダ統治時代の拠点である安平古堡を見学した。安平古堡は、台北の伝統的建築様式とは大きく異なる、西洋的な建築物であった。安平古堡内部には資料館もあり、オランダ統治時代の統治体制図や兵士の像なども展示されており、初期台湾史の実像に触れることができた。次いで、陳先生のご案内で国立成功大学のキャンパスツアーへ。国立成功大学も、国立台湾大学と同様に日本統治時代にその前身を持ち、校内の様子などは、多少の南国的な自然もありながら国立台湾大学、そして一橋大学に似ている印象を受けた。国立成功大学の次は、ここもオランダ統治時代の拠点である赤嵌楼を訪れた。赤嵌楼は、安平古堡とは違い、東洋的な城塞を持ち、日本の城を想起させるような外観であった。ここも、内部には資料館があり、オランダによる台南統治の地理的な情報について詳細に記述されていた。台南は、台北とは、気候・建築様式・人々の性格も異なるところがあった。陳先生のご解説もあって台湾に存在する多様性を肌で感じる事が出来たのがこの日の収穫。また、台湾高速鉄道に関していえば、日本の7企業連合の技術輸出によって建設されたものであり、車内の内装は日本の新幹線と錯覚させるほどによく似ていた。台湾高速鉄道を通じて、日本

のインフラストラクチャー輸出と海外における日本の存在について認識を深めることが出来た。



8/8（月曜日） 7日目

7日目は、班別の自由行動とした。全体行動へ偏りを是正するために前回のシンガポール遠征から導入した班別自由行動であるが、今回も事前に班長から行動計画を提出させ、それを遠征担当が管理した上で、5つの班に分かれて朝から午後3時まで自由行動した。

詳細は、各班の報告書を参照して頂きたい。

II. 部門別報告

(1)交流・討論会部門報告

総括①（国立台湾大学との交流全般）

文責 4年 栗野 一輝

国立台湾大学は、旧帝国大学を前身としており、台湾内でトップレベルの大学である。今回の台湾遠征の中で、国立台湾大学との交流は中核をなす部分である。前回のシンガポール国立大学との交流を経て、もっと交流試合の時間を増やしたい、交流討論会の密度を濃いものにしたい、という反省をもとに、7日間の日程のうち、ほぼ丸二日を台湾大学との交流に充てている。

交流内容を大分すると、(1)親善試合・(2)交流討論会・(3)キャンパスツアー・(4)交流夕食会の4つに分けられる。それぞれの詳細は該当報告に譲るとして、全体の流れを概観しつつ、台湾大学はどのようなカルチャーを持っていたかについて話したい。

はじめに、国立台湾大学男子バレーボール部は創部20年ほどで、つい数年前から「体育学生」を募集し、最近では台湾大学リーグで1部3位の成績を取っていたこともある強豪チームであった。台湾では、日本のような中高の部活はなく、一般学生と体育学生に分かれてそれぞれの分野で成績を残していくようだ。台湾大学では体育学生の推薦入学が行われているが、あくまで入学のきっかけであり、一般学生と同じように各学部（いわゆるスポーツ学部のようなものはまだ学部にはないようである）に振り分けられ、同じようにカリキュラムを修業しなければならない。したがって中には単位数が足りず留年する者もいるようだ。練習は週二日で、学部生は必ず毎回参加、院生は任意参加である。日本では、学部と院の隔たりが大きく、学部生は大学院の実情を気軽に聞ける場が少ないと感じる。学部生と院生が同じ部活に所属し、練習を共にするという日本には殆どない珍しいスタイルは魅力的に映った。

交流討論会および交流夕食会を通じて、院生は学力も英語力も圧倒していたと感じたが、学部生は自分たちと同じくらいの英語力か、少し国立台湾大学側の方が高いくらいであったと感じた。今回は前回と異なり、非英語ネイティブ同士の交流ということで、お互い分からないことがあったら漢字を使ったり、身振り手振りでコミュニケーションをとっていた。

国立台湾大学が一橋大学をはじめ日本の大学と異なっていると感じた部分は、学問と生活とが一体となったキャンパスライフを提供していることだと思う。日本は学生数の割に敷地面積がとれないということもあるが、教室や図書館で勉強した後、テーマパークにあるような売店で飲み物を買うのもよし、大きな池のほとりで魚や鳥を観察するのもよしで、職住隣接ならぬ学住隣接のキャンパスづくりを目指しているように感じた。その点、

台湾も欧米の大学のように、日本も参考にすべきであると思う。

また、台湾大学の学生は非常に親日的で、日本に来たことがある学生は複数人おり、来年から日本の大学へ留学する学生もいた。よく台湾は親日的と言われることがあるが、実際に国立台湾大学の学生という、非常に学力が高い若い世代の人々も、日本に興味を持ってくれていることを実際に体感した。それはありがたいことであり、自分たちや彼らが社会で活躍する年代になったときにその関係をさらに発展させるためにも、今回できた関係を継続するようにしたい。

総括②（交流討論会）

文責 3年 宮口 佑太

前回のシンガポール遠征に続き、今回の台湾遠征でも英語での討論会を行うこととなった。それに際して、討論会の準備や当日の進行を行う「討論会班」が結成された。討論会班では、まず前回のシンガポール遠征に参加した3・4年生のメンバーを中心に、前回の討論会の反省点を挙げることから始めた。挙げた反省として、①プレゼン・進行に携わっていない部員が内容を知らず、当日行き当たりばったりで討論をせざるを得なかったこと、②そもそも英語の準備が不十分であったこと、の2点が主に挙げられた。

その後、これらの反省点を踏まえ、7/2（土）・7/30（土）の2回行われた事前勉強会のための準備を進めた。1回目の勉強会の前には、先述した①を踏まえ、勉強会班員が各々本や新聞などから得た知識などを班内で事前に共有・整理した。勉強会当日では日本語で各テーマ（日台関係、AI）について自由に討論する際、各グループの討論会班員がこれらの知識を利用して議論をリードしていくなど、部員全員が十分な基礎知識をつけられるよう工夫した。2回目の勉強会では、実際に英語で討論を行った。討論会班では、先述した②を踏まえて、議論の最中に使えるフレーズ集・各テーマに即した用語集・議論の流れを想定した英文例集などを用意し、英語に課題のある部員一同の一助になるよう努めた。

当日の様子については、1年旭が討論会本番について記述するためここでは割愛し、以下で私の感じた成果と反省について述べる。まず成果としては、前回の討論会に比べ、部員の発言が格段に増えたことが挙げられる。討論会班が準備した資料や勉強会の内容を踏まえた、各グループでの話し合いが事前に行われ、当日も言葉に詰まる部分はありはしたが、活発に意見を伝えていたと感じている。一方で、まだ相手に圧倒される場面もあったため、英語能力の底上げが必要だと感じた。これについては部員一同、自らの英語の至らなさを痛感しているため、これを機に次回の遠征での討論会に向け英語学習を継続させていく土壌を作ることが、先を見据えた討論会班としての課題ではないかと思う。また私個人の反省とし

て、班員への割り振りがうまくいかなかったことが挙げられる。班長の私が多くを自分で担当したことで、班員内での共有がうまくいかなかった部分があった。ここがうまくいけばより円滑に進められたため、早め早めに計画・行動すべきだった。

私自身、シンガポール・台湾での2度の討論会を経て、やはり世界のトップレベルの大学の学生と討論を行うことは、かなりの良い刺激になると感じている。このような機会への多大なご支援をいただいている如水会や OBOG 会の皆様への感謝と、「一橋生としての確固たる矜持」を持って堂々と討論会に参加できるような入念な準備を後輩たちに期待して、総括としたい。

内容詳細

- ・交流試合
- ・交流討論会
- ・国立台湾大学キャンパスツアー
- ・国立台湾大学との夕食会
- ・交流協会台北事務所訪問

交流試合① (1日目)

文責 4年 宇野 宏祐

【日時】2016年8月3日(水) 9:30~16:30

【場所】国立台湾大学構内体育館

【試合結果】レギュラー戦 2:3 で敗戦 (13-25、20-25、25-16、26-24、18-20)
新人戦 0:3 で敗戦 (22-25、15-25、14-25)

【概要】

台湾遠征2日目午前、国立台湾大学と5セットマッチで交流試合を行った。我々はこれまで「サーブで崩し、繋ぎ負けないチーム」をコンセプトに練習を積んできていた。台湾大学はセレクション入学選手を中心に体格・テクニックで本学に勝っていた。

1セット目、慣れないコート・相手の早いトス回しに翻弄され、序盤から相手に攻め込むことができずに展開。サーブで攻め込むどころか逆に崩され、やりたいバレーをやられる形となり、このセットを13-25で落とした。2セット目、徐々にコートにも慣れ、台湾大学のバレーに対応するようになったが、要所で相手エースに決められ点差をギリギリと開けられて20-25でセットを終えた。あとが無くなった3セット目、台湾大学は半数ほどメンバーを交代。その隙を突いた本学は序盤からサーブで崩しながら点差を広げ、25-16で1セット取り返した。4セット目、メンバーを元に戻して挑んだ台湾大学に対し、前セットで調子づいた本学は、サーブで崩しながらレフト中心の攻撃で得点を重ねた。台湾大学は高さのあるオポジットにボールを集め応戦。一進一退の展開だったが最後は相手のミスで得点をあげ、セットカウント2-2で追いついた。最終セット、お互いの持てる力を存

分にぶつけ接戦を演じたものの、最終盤での連携ミスが響き、18-20でこのセットを落とし、セットカウント2-3で敗戦となった。

2日目午後、両校1,2年生同士でチームを作り5セットマッチで対戦した。まだまだ技術的にも戦略的にも未熟な本学に対し、台湾大学も繋ぎの部分に甘さのあるチームであった。

1セット目、序盤サーブが走りリードを奪い有利に試合を展開。しかし中盤以降レフトがブロックに捕まり始めると、本学がミスを連発。結局最後はブロックを決められ22-25でこのセットを落とした。2セット目、序盤からサーブで崩され、台湾大学の攻撃にやられて試合を決定づけられてしまった。最後まで流れを引き込むことができず、15-25で敗戦。後が無くなった。3セット目、連携の部分やプレー一つ一つの荒さが目立ち、なかなか思うように攻撃できない展開に。台湾大学はやや繋ぎに苦しみながらも得点を重ね、14-25で敗戦となった。

【感想】

総じて、国立台湾大学は高さのある早い攻撃をストロングポイントとしており、日本にはなかなかお目にかかることのできないレベルでのプレーを体感すること、日本とはスタイルやプレーの前提の異なる相手に対応し互角に渡り合えたことは、今後の戦い方を考える上で自信につながる経験であった。

交流試合②（2日目）

文責 4年 長尾 知樹

【日時】2016年8月4日(木) 9:30~11:30

【場所】国立台湾大学構内体育館

【試合結果】レギュラー戦 2:3で敗戦 (20-25、19-25、25-18、27-25、15-17)

【概要】

台湾遠征3日目午前、国立台湾大学と5セットマッチの交流試合を行った。遠征2日目午前に行われた試合の雪辱を果たすべく、部員一同闘志を燃やして試合に臨んだ。

1セット目、序盤から一橋のミスが続き、スコアは13-17と国立台湾大学にリードされる。一橋の攻撃が決まり始め、20-20に追いつくも、終盤国立台湾大学に攻撃を決められ、20-25で第1セットを落とす。



2セット目、両校共に連続得点を取り合う試合展開だったが、国立台湾大学がクイック攻撃を有効に使いながら優位に試合を運び、19-25で一橋は第2セットも落とす。

3セット目、序盤から一橋の攻撃がうまく決まり、13-7と一橋がリードする。その後、一橋のレフト攻撃が続けて国立台湾大学のブロックに止められ、13-12と追い付かれる。しかし、一橋のクイックを織り交ぜた攻撃やブロックによる得点、国立台湾大学のミスにより、25-18で一橋が勝利する。

4セット目、両校共にスパイク攻撃により連続得点を取り合う試合展開になり、デュースとなる。一橋がスパイク得点、サービスエースにより、27-25で勝利する。

5セット目、国立台湾大学のレフト攻撃が続けて決まり、国立台湾大学に8-11とリードされる。その後一橋のブロックが決まり、デュースに持ち込むも、最後まで国立台湾大学のレフト攻撃を止めることができず、15-17で第5セットを落とす。

結果、セットカウント2-3で一橋の敗北となる。

【感想】

遠征2日目の試合の雪辱を果たせず、悔しい結果となった。しかし、国立台湾大学の日本ではあまり見られない早い攻撃や、国立台湾大学に所属する大学オリンピック代表選手のプレーを体感することができた。この遠征を通じてこそ体験できたことであり、今後のリーグ戦に向けても貴重な経験となった。また国立台湾大学の学生とお互いのプレーについて会話することができ、お互い打ち解けることで、その後の討論会をスムーズに行うことができた。スポーツが国際的なコミュニケーションを取る上で有効なツールとなることを身をもって体感できた。

以下、ベンチメンバー表を掲載します。

背番号	氏名	学年	背番号	氏名	学年
1	酒井	3	13	佐々木	2
2	山浦	3	14	比氣	1
3	裏田	3	15	吉田(大)	1
4	小林	3	16	住吉	2
5	栗野	4	17	今井	1
6	竹内	3	18	吉田(陽)	1
7	宇野	4	19	相川	2
8	栗本	2	20	笠原	1
9	宮口	3	21	石田	1
10	平林	2	22	渡邊(雄)	1
11	長尾	4	23	阪口	1
12	岡田	4	24	渡部(龍)	1

スターティングオーダー

・レギュラーチーム

(一日目と二日目午前)

栗野 長尾 裏田

岡田 酒井 小林

(リベロ宇野)

・一・二年生主体チーム

(二日目午後)

阪口 吉田(大) 比氣

竹内 吉田(陽) 今井

(リベロ渡部・渡邊)

交流討論会

文責 1年 旭 麻衣

【日時】2016年8月4日(木) 12:30~14:30

【場所】国立台湾大学

【概要】

当日は午前中に国立台湾大学バレーボール部と1試合行い、お昼を彼らと共に食べた後に討論会が行われた。一橋大学の生徒は自由行動班と同じく5班に分かれ、国立台湾大学の学生にも5つの班に分かれてもらい合計5つの班を作った。まず12時半から一橋大学三年宮口から今回の討論会がどのような流れで行われるのかと1つ目の討論会のテーマである日台関係の二点についてプレゼンがあった。それに続き、一橋大学二年平林から2つ目のテーマであるAIについてプレゼンが行われた。それらを踏まえて13時から20分程各自のグループ内で自己紹介をして英語のウォームアップをした後に、13時20分から30分程各グループで2つのテーマのうち事前に指定された1つについて意見を交わした。5班のうち3つが日台関係、2つがAIについて話し合った。13時50分からは各班の代表一人がその班で議論された内容について発表を行った。各班の発表が行われた後は、それらを踏まえて全体での討論が行われた。お互いに疑問に思ったことを共有し、より一層理解を深めた。最後に一言討論会のリーダーである宮口から挨拶があった後、討論会は終了した。

【勉強会との関連】

今回の討論会の2つのテーマは日台関係とAIという日本語でも難しい内容であったため、一回目の事前勉強会ではまず日本語でこれらのテーマについて意見を交換した。そこで出された意見や、本番の討論で想定される質問やそれに対する回答などを討論会班が英訳したものを全部員に共有した。また、討論で使用できる自分の意見を言う際に使えるフレーズや、2つのテーマに関連する単語なども共有し、それらを用いて二回目の勉強会では実際に英語で討論を行った。これにより、ある程度自分の班のテーマについて英語で意見を言う準備をすることができた。また、事前に英語での討論を行ったことにより、当日の討論でも積極的に英語で自分の意見を言う姿勢が見られた。

【感想】

討論会当日を迎えるまでは、果たして英語で日台関係やAIといった難しい内容について英語で討論することができるのだろうかと不安しかなかったが、国立台湾大学の学生と話してみると案外自分の考えや意見が英語で伝わり、たとえ文法が間違っていたとしても相手に英語で何かを伝えようとする気持ちが重要であると感じた。また、個人的には私の班では日台関係について話しあったため、国立台湾大学の学生に実際日本を訪れたことがあるか聞く機会があったのだが、予想以上に日本に遊びに来てくれている人が多く、民間レベルでの日台関係は非常に良好であることを実感することができた。

国立台湾大学キャンパスツアー

文責 1年 今井 優貴

【日時】2016年8月4日(木) 16:00~17:00

【場所】国立台湾大学キャンパス構内

【概要】

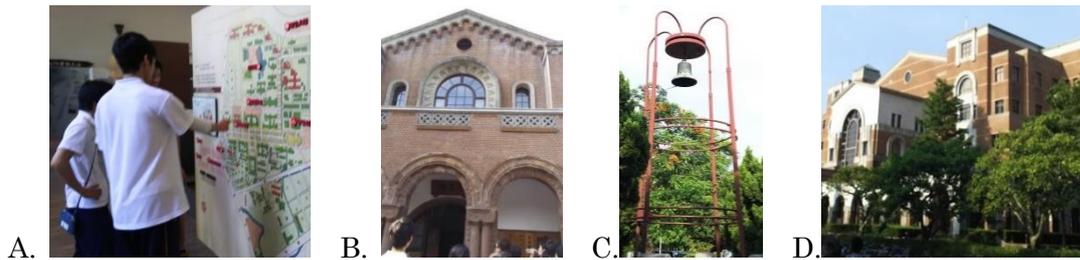
国立台湾大学バレーボール部との交流試合、交流討論会の後、国立台湾大学バレー部員の方たちに英語でキャンパスの案内、ガイドをしていただいた(下写真A)。体育館内の討論会会場を出てからヤシの木の並ぶメインストリートを通り、旧帝国大学時代の建物であり、貴重な資料を数多く展示している校史館(下写真B)を訪れた。その後、授業始業・終業時のチャイムとして使われている鐘(下写真C)を紹介してもらい、実際に授業・研究が行われている校舎や多くの学生が利用する売店などを見て回った。最後に7階建の巨大で立派な図書館(下写真D)を訪れた。台湾一の総合大学ゆえキャンパスはとても広く、私たちが訪れた本部キャンパス以外のキャンパスも含めると台湾の総面積の100分の1を占める。

【勉強会との関連】

遠征前の勉強会で台湾の日本統治時代の歴史について勉強した際、国立台湾大学の前身の台北帝国大学は、日本政府の教育重視の政策の下で設立されたことを学んだ。校史館内の展示には昔の校歌など日本語の資料もあり、国立台湾大学はもともと日本の帝国大学の一つで、日本とのかかわりが深いという事を改めて実感した。また、台湾はこのような日本統治時代の政策により、現在も教育に非常に熱心である。このことを実感した例として、授業の始業・終業を告げる鐘がある。この鐘は毎回21回も鳴らすそうで、それは「一日は21時間しかない。3時間は沈思黙考の時間である。」という過去の学長さんの言葉によるとのことである。このように国立台湾大学は大学の精神・校訓を忘れないようにするくらい勤勉であるということを実感した。

【感想】

はじめに見学した校史館の建物は下の写真にもあるように一橋の兼松講堂にそっくりであり、非常に親近感を覚えた。日本の植民地時代に建てられた台北帝国大学が前身ということで日本ともかかわりが深い大学について、貴重な資料や学生の生の声を聞くことができたのは、日本人として非常に価値ある経験だった。さらに一橋とは規模も違い、また文化も違う大学を見学したことは、部員全員に刺激を与えてくれた。



国立台湾大学との夕食会

文責 1年 吉田 陽

【日時】 2016年8月4日(木) 18:00~21:00

【場所】 JustItalian

【概要】

国立台湾大学バレーボール部の方々にキャンパスツアーを行ってもらった後、そのまま大学近くの **JustItalian** というレストランで夕食をかねての夕食会を行った。レストランはパスタやローストビーフなど様々な料理が並ぶビュッフェ形式であった。食事の席は特に指定がなく、各々が好きな席に座るというラフな形式だった。ただ、直前までキャンパスツアーを行っていたこともあり、キャンパスツアーにて仲良くなった人同士で座る人が多かった。また、台湾大学側も監督さんをはじめ、20人前後も参加して下さったこともあり、一橋大学の部員だけかたまるということはほとんどなかった。食事の席では、お互いの大学生活や受験の話をはじめとし、バレーの練習方・メニューなどキャンパスツアーでは話せなかった話題についても話し合った。食事の席がとても和やかな雰囲気だったので、お互いにとても話が弾んだ。そのため、当初は2時間ほどで終了する予定だったが、お店側の配慮もあって一時間延長できることになり、有意義な時間を長く楽しむことができた。

【感想】

今回の夕食会を通して最も痛感したことは、直接話をする事の大切さである。遠征に来るでは、台湾大学の学生に対して漠然としたイメージしか持っていなかったが、実際に話をすることで彼らの優しさや日本に対して持つ感情にじかに触れることができた。私たち一橋の学生が拙い英語で話しても真摯に聞いてくれたり、彼らの英語がわからず聞き返したりしても何度も優しく言い直してくれた。また、日本の生活について積極的に聞いてくれたりしたところから、彼らの興味関心の高さがうかがえた。こうした彼らの姿勢に触れられ

たことが、今回の夕食会での最大の収穫だったのではないかと思う。ただ、自分に英語力があればもっといろいろなことを話し合えたりできたかもしれない、という若干の後悔もある。そして、普段は日本語で話せ、不自由なくコミュニケーションが取れている分、英語を通した異文化交流の難しさを痛感した。これらの反省を踏まえ、日本に戻った後、より一層英語の勉強、特に英語を通じてのコミュニケーションに取り組んでいこうと思う。



交流協会台北事務所

文責 2年 平林 凜太郎

【日時】2016年8月5日(金)16:00~17:00

【場所】公益財団法人交流協会台湾事務所

【概要】

交流協会に到着すると、建物内は安全と機密保持のため撮影が一切禁止との説明を受け、全体の緊張感が高まった。日本と台湾は1972年の日中国交正常化によって公式な国交を喪失しているが、交流協会が実質的な大使館の役割を果たすことによって出入国や貿易、経済といった面での実務レベルの交流関係を維持している。今回の訪問では沼田幹夫代表と面談し、貴重なご講話をいただいた。

昨年の日台間の往来は初めて500万人を超え、日台間の関係は深化し続けているが、沼田代表は歴史的な背景から日台関係を説明して下さった。現在の台湾には3段階の世代階層があり、それぞれに異なった対日感情を形成しているという。80代以上の世代は日本語教育を経験し、日本が行ったインフラ整備などについても理解している。一方30代~70代の世代は国民党教育で反日感情も植え付けられており、親日と反日の相反する感情が混在している。しかし、この世代の終盤に李登輝が行った教育改革によって10代~20代は親日化が進んでおり、現在の日台関係の良好化に繋がっているという。また、蔡英文政権は対中関係について曖昧なままの現状維持を目指しているが、これは日本にとっても望ましいものであるという見解をお聞きし、今後の日台関係の展望も伺うことができた。

面談の最後に設けていただいた質疑応答の時間では、事前学習を踏まえ、現在の台湾の実情に関する質問が複数飛んだ。台湾一般市民の日本に対する実際の感情、内省人・外省人といった意識の差の有無など、台湾にいないと感ずることの出来ない微妙な感覚を教えていただくことができ、総じて「台湾人」としての意識がマジョリティ化して対内・対外的な姿勢を形成していることが分かった。

【感想】

沼田代表は非常に分かりやすく日台の歴史を説明してくださったが、勉強会によって事前に大まかな流れを学習していたことで理解がより深まり、お話を受けての質問の時間が活発化したように思う。国立台湾大学との交流で感じた若い世代の親日的な態度、ハイテク企業の訪問で目の当たりにした今日の台湾のスピード感についても、実際に台湾に在る日本人という立場の方からお聞きできたことで実感が強まった。しかし同時に、優秀な人材が国として認められない台湾を離れ、欧米に流出してしまっている現状をお聞きし、台湾、更には同様な動きが見られる日本の今後についても考えさせられた。また、ひとりひとりの一般市民の力、学生の力が全体を動かす力となる、やりたいことに悩み、思うままにやってみることが大切だという訓示もいただき、今回の訪問は大変有意義なものとなった。

(2)ハイテク産業部門報告

総括

文責 3年 竹内 誠也

今回の遠征においてハイテク産業について学べたことは、大学で学んでいることやニュースで耳にすることを実体験でとらえることができる素晴らしい機会であったと思う。ハイテク産業が台湾で盛んであると耳にするが実際どうであるかを自分たち自身の目で見ることができた。

まず企業訪問をするにあたって事前に勉強会を行った。事前の勉強会では、①ハイテク産業とは何か。②ハイテク産業は日本と台湾においてどのように変化し、現状はどうなっているか。③訪問する Panasonic 台湾、msi はどのような企業でハイテク産業全体ではどのような立ち位置か。の3つの点をハイテク産業班が分担して調べ、全体に発表した。

ハイテク産業とは何か。においては、自分たちにとって身近な存在であるバレーボールにおいても、世界バレーではチャレンジシステムが近年導入され、コンピューターが審判のジャッジの手助けをしているという観点から始まって、ハイテク産業とはコンピューターやバイオテクノロジーなどの先端技術を中心とした産業であることや、よく混同される IT 産業との違い、ハイテク産業が生まれた経緯を学んだ。

ハイテク産業が日本と台湾においてどのように変化し、現状はどうなっているか、については日本では 1990 年代からゲームの開発が盛んになり、ハイテク産業発展の絶頂期になっていたが、現在では成長の速度が遅くなり、衰退し始めている一方で、台湾では 1990 年代から政府がハイテク産業発展のための支援を行い、近年では世界トップクラスのハイテク産業となる急成長をしているということを学んだ。

訪問する Panasonic 台湾、msi はどのような企業で、ハイテク産業全体ではどのような立ち位置あるか、については両社の設立や時期や会社規模、作っている製品などについて学び、Panasonic 台湾は台湾において家電販売売上の 30%近くを占めており、msi はマザーボードを作っている世界の三大会社の 1 つであることを学んだ。この両社についての勉強は企業訪問に特に直結した内容となった。実際の企業訪問では、Panasonic 台湾ではハイテク産業の中心である IC の製造工程を見せていただき、なかなか得られることのできない機会となった。msi では、かつてパソコンにおけるゲームはデスクトップパソコンでなくては容量が足りなかったが、近年はノートパソコンでも実現できるようになったという説明を受け、実際にそのパソコンを見せていただき、その他にも最新のナビシステムなどを実際に体験させていただいた。

これらの企業訪問はこれから就活を控える 3 年生以下にとっては、ハイテク産業はどのような業種で、就職するにはどのような能力が必要であるかということ学ぶ機会とな

り、春から社会人となる4年生にとっても、企業で実際に勤務する際、現状がどうなっているのかを学ぶいい機会となった。

このような機会を設けて下さった如水会台湾支部の松木さんと見学に応じていただき僕たちの質問にも快く答えてくださった Panasonic 台湾と msi の皆さんに感謝したい。

内容詳細

- ・ Panasonic 台湾訪問
- ・ msi 訪問

Panasonic 台湾訪問

文責 1年 石田 龍

【日時】 2016年8月5日(金) 10:00~12:00

【場所】 Panasonic 台湾

【概要】

当日は最初に Panasonic 台湾の総経理を務めていらっしゃる林さんと、如水会台湾支部の支部長でいらっしゃる松木さんから挨拶をいただいた後、グローバル Panasonic と Panasonic 台湾についての2本のビデオを鑑賞した。ビデオを通じて Panasonic が自社の活動を通じて社会貢献も目指すという経営理念を学び取ることができた。ビデオの後、質疑応答の時間を経て、ショールームの見学をさせていただき、狭い空間でもたくさんの収納が可能な靴箱や、ゴキブリの発生を抑えるキッチンシステム、エコナビを搭載したテレビなどを見させていただいた。この後、二つのグループに分かれて SMT ラインと冷蔵庫完成品ラインの2つの工場見学を行った。各ラインにおいて複数の従業員の方が、機械と人の作業分担の振り分け方法とその理由、作業を効率化させるための工夫などを説明してくださった。

【勉強会との関連】

勉強会では Panasonic から Panasonic 台湾に分化した過程や、高い製品品質によって製造業の中で唯一国家品質賞を2回受賞していること、環境への配慮からエコナビを発表したこと、また台湾の発展によって労働者の賃金が上昇したことに伴い構造改革が行われた結果、製造の中国、開発の台湾という分業体制が築かれたことなどを学んだ。これらの知識があることで質問の際に生産だけを現地で行う他企業とは異なり構造改革によってなぜ開発まで行ようになったのかという理由を聞くことができ、答えとして地域に密着することで人々のニーズを取り入れたより良い生活空間を構築したいという企業の強い思いを感じることができた。

【感想】

はじめに平日の勤務時間中であるにもかかわらず企業訪問を受け入れてくださった松木さんと、お忙しい中工場案内をしてくださった従業員の方々に厚く御礼を申し上げたいと思います。実際に生産ラインまで見学させていただけたことはこのような遠征を通じなければできない貴重な経験であったと感じました。また総経理のお話を通じて、ただ売上げを伸ばすだけでなく社会的な責任を果たすことや、環境保護、地域の人々とのつながりを大切にしていこうとする企業の姿勢を学び取ることができ魅力を感じるとともに、一流企業であり続けている理由を理解することができたと思う。さらに自分が会社で何をやりたいのかという明確なビジョンを持つことが重要であるという人事の方のお話も伺うことができ、まだ1年ではあるが大学4年をどう過ごしていくのかを再考するよい機会となった。今回の経験を今後就活や社会人として働く際に活かしていきたいと思う。

msi 訪問

文責 1年 比氣 朋訓

【日時】2016年8月5日(金) 13:30~15:00

【場所】msi 本社 (新北市)

【概要】

新北市に本社を構えるコンピュータ関連製造会社の msi (Micro Star INTL Co., LTD.) を訪問した。午前中に訪問した Panasonic 台湾とは異なり台湾企業であることに加え、他国への製品供給も社名の表に出ないOEMの形で行われるものが多いことから、日本で社名を耳にすることは少なかったため、どんな企業かを肌で感じられる今回の訪問を非常に楽しみにしていた。現地ではまず msi の概要および最近の取り組みについて話を伺った。その後、近年力を入れているゲーミング用パソコンを据え付けたショールームや自社ブランド「FUNTORO」開発の車載用コンピュータが並ぶスペースを見てまわった。

【勉強会との関連】

事前に行った勉強会では、msi はマザーボードやビデオカードの生産を核に世界のコンピュータ業界に名を連ねてきたこと、近年は国内外の他の企業の追従もあってゲーミングや車載用コンピュータなどの分野に事業を拡大し経営を多角化させていることなどを確認していたが、社員の方々の話を実際に伺うと、その意識が我々の想像をはるかに上回るものであることが分かった。これは、実際に見せていただいた二部屋がゲーミングと車載用コンピュータ関連のものであったことから明らかであり、実際 msi は2015年、企業ロゴをゲーミングを前面に押し出したデザインのものに一新している。また、msi では、5人の創業者が各部門の現場まで降りてきて直接指導するなど、日本の企業のように形式を重んじ関係が固定的になることは比較的少なく、IT分野における中国や韓国の追従への危惧から、ビジネスの好機を逃さない意思決定の速さを重要視しているというお話もうかがった。

顧客のニーズに合わせて主な市場を変更することもいとわない、msi の柔軟かつ積極的な企業経営の一端が見てとれた。

【感想】

まず、msi が近年ゲーミングや車載用コンピュータに力を入れている点についてだが、他のIT企業のように一つの部門・製品で勝負するのではなく、様々な分野での活動を意識しているというようなお話があった。やはり、競争や入れ替えの激しいIT、コンピュータ関連産業で生き残っていくためには、あらゆるビジネス、あらゆる可能性を視野に入れ、柔軟な思考のもとで能動的な経営戦略をとっていくことが重要なのではないかと感じた。また、社員の方々の印象として、皆非常に明るく積極的で、我々も質問など非常にしやすかった点が挙げられる。IT 産業が求める人材像が垣間見えた気がする。4年後、自分が社会人として働くということを考えても、具体的なイメージを持つことができた非常に有意義な視察だった。msi の社員の方々、ならびにセッティングに尽力してくださった Panasonic 台湾の松木さん、バレー部OBの先輩方など関係各位に感謝したいと思う。

(3)歴史文化部門報告

総括

文責 2年 住吉 瑞基

今回の海外遠征では、主に国立台湾大学の学生との交流、台湾のハイテク最先端技術視察、台湾の歴史と文化学習の三点を学ぶべき柱として掲げてきた。その中でも台湾の歴史と文化を学んで臨むのには大変大きな意味を有していたと思う。なぜならその学習が台湾の政治的背景、経済状況、国民的意識などの理解に直接的に繋がるためである。

海外遠征前の事前勉強会では、台湾の歴史と文化の学習を歴史文化の班員が先導して行った。台湾の統治者などから時代を四分割して、プレゼンテーションを実施した。(区分は以下の通り。1.オランダ・鄭氏統治時代、2.清朝統治時代、3.日本統治時代、4.中国国民党統治時代から現代まで)

まずは一つ目のオランダ・鄭氏統治時代について。遠征で関連していたのは、六日目の安平古堡と赤嵌楼を訪れた台南見学だ。安平古堡は堅固な防衛城として実に見事な建築であった。歴史ある城壁や大砲の跡が見られたほか、積み上げられたレンガの群からは西洋的建築の特徴も色濃く感じられた。赤嵌楼でも城砦跡や記念碑が歴史を感じさせ、城内の水路跡からは水源確保の術が伺えた。そして両者に共通していた点が、台湾の人々が鄭成功を英雄として祀り、その遺品や偉業を丁寧に紹介していたことだ。

次に二つ目の清朝統治時代について。これには五日目に訪れた故宮博物院が関連する。故宮博物院では、中国の石器時代の陶器や明清時代の皇帝の遺品など幅広い歴史的遺産が展示されていた。事前勉強会では、故宮博物院に中国の遺品が多く残されていることの経緯と博物院の詳細について学習してきた。見学当日はガイドの謝さんの丁寧なご説明もあり、古代中国からの流れや清朝期の皇帝の愛用品に渡るまで多くの実物を目にする事が出来た。勉強会で事前に紹介されていたものもあり、非常に有意義な見学となった。

そして三つ目の日本統治時代については、五日目の国立台湾博物館が関係する。ここは元台湾総督の児玉源太郎や民政局長を務めた後藤新平を記念した歴史ある博物館で、台湾の原住民文化や台湾特有の自然についても説明がなされていた。特に外観の西洋ルネッサンス様式の建築は勉強会で学んでいたところであり、その荘厳な佇まいは圧巻であった。またあまり学習する機会がなかった原住民文化の学習もでき、非常に良い機会になった。

最後に四つ目の中国国民党時代についてだが、ここも五日目に訪れた中世記念堂が関連する。ここは中華民国初代総統の蒋介石の記念堂であり、その遺品や巨像などを見学し、現地の台湾の人が蒋介石という人物を偉大な指導者と評価する姿勢を強く感じられた。また勉強会で挙げていた衛兵の交代式も見学することができ、実りのある学習になった。

こうした場所を回り、台湾の歴史と文化の理解を深められた。特に日本での学習と現地

で感じた台湾人の歴史観とのギャップが新たな理解に繋がったと強く感じる。こうした経験はやはり日本での学習だけでは成し得ないことであるため、今回の遠征での見学は、自分たちの歴史観を問い直すという意味でも非常に貴重な機会になったと思う。

内容詳細

- ・ 故宮博物院
- ・ 国立台湾博物館
- ・ 中生記念堂
- ・ 安平古堡
- ・ 国立成功大学キャンパスツアー
- ・ 赤嵌楼

故宮博物院

文責 3年 辻 佳奈子

【日時】2016年8月6日(土) 9:00~11:30

【場所】故宮博物院

【概要】

故宮博物院とは、所蔵数 69 万点と台湾で最も大きな博物館で、中国の古い書物や美術品が保管・展示されている場所である。中国での国共内戦後、蒋介石が中国大陸から台湾へ移動する際に中国の財宝であるそれら美術品も運んできたことによる。展示品は3ヶ月に1回入れ替えが行われ、1回で約5万点の展示物を見る事ができる。我々が見学の時は、西周時代の土器や青銅器、明・清時代宮廷の遺品、明代～近代の書画などが展示されており、前半の1時間半はガイドによる案内で主要な物品の説明を聞きながら1～3階を見て回り、後半の1時間は班ごとに興味のある展示エリアへ行き見学した。

ガイドによる案内では、それらの展示物がなぜ作られたのか、どのように用いられていたのか、といった内容を時代背景と共に説明を受けた。また、中国の年表が書かれている部屋では、ガイドの説明により、高校の教科書に載っていないようなその時代の庶民の暮らしから政治レベルまで、古代から近代までの歴史を学んだ。

班ごとの見学では、私の班はチベット仏教伝来の仏像や絵画、書画を見学した。

【勉強会との関連】

事前勉強会では、故宮博物院とは他の博物館とは異なるどんなところなのか、中国の美術品が集められた理由、中国大陸で集められた美術品が台湾に移された経緯、そ

して実際に保管されているもののうち代表的な物を勉強した。これらの前提知識を持っていることで、展示品のすごさやガイドによる詳しい知識もわかりやすいものになった。故宮博物院で最も有名な白菜と豚の角煮のつくりものは残念ながら展示されていなかったが、勉強会で学んだ土器などが展示されており、一度勉強したものであるから関心を持って見学することができた。

【感想】

見学に行ったのは土曜日であったため他の観光客団体も多くおり、博物院内は混雑していたが、ガイドがマイクで話した声が聞き取れるイヤホンが一人一人に渡されたので、後ろの人までガイドの説明が行き届いたのが良かった。展示物の説明はほとんど中国語と英語で書かれていて自分では曖昧にしか理解できないため、ガイドによる説明でその展示物が作られた目的や時代背景を理解できたことは、この故宮博物院見学を有意義なものにしてくれたと感じる。この台湾遠征で、台湾最大の博物館を見学でき、大変良い機会であった。

国立台湾博物館

文責 2年 相川 泰輝

【日時】2016年8月6日(土) 13:00~14:00

【場所】国立台湾博物館

【概要】

国立台湾博物館は1908年に日本政府によって建てられた、台湾最古の博物館であり、イタリア産の大理石が階段や壁などに使われているルネサンス様式の建物として知られている。当初は台湾の発展に貢献した台湾第4代総督の児玉源太郎と民政局長の後藤新平を記念するために建てられ、1915年に現在のような博物館となった。台湾の歴史と自然がテーマになっており、「台湾の生態系」と「先住民族の生活・文化」についての展示が行われている。また、この博物館は台北二二八和平公園内にあり、同公園内に立てられていた台北二二八記念館・犠牲者の慰霊碑も同時に見学することができる。

当日は、この博物館が建てられた歴史とどのようなものが展示されているのかについてのガイドさんの説明を聞いた後、班別行動での見学となった。私たちの班は博物館の見学をした後、二二八記念館を訪れ、二二八事件の全貌や関係者の日記などを見学した。ただ、スクールの影響で予定よりも一時間ほど早く見学は終了した。

【勉強会との関連】

事前勉強会では、国立台湾博物館の特徴として日本ではあまり見られないルネサンス様式の建物であること、日本人にとってなじみの無い台湾先住民についての展示がある珍しい博物館であることが挙げられた。また、日本の台湾統治の歴史として先住民族による抵抗とそれらを日本軍が鎮圧していったことを学んだ。勉強会で基礎程度の知識を学んでいたことで、展示品の説明が中国語であっても内容をある程度理解することができ、充実した見学ができた。



【感想】

日本が統治する以前の台湾については、今までほとんど学んだことが無く、今回の見学は貴重な経験であった。博物館の外観・内装からは、当時の日本政府が台湾においてどれほどの権力を持っていたのかということを感じることが出来た。先住民族の生活・文化に関する展示は、日本では見たことのないものばかりで新鮮であったが、同時に日本軍にとってこれらの貴重な文化が失われてしまったということも感じさせられた。台湾の生態系についての展示は山・川といった地形ごとにジオラマが作られており、少しではあるが、台湾の自然について触れることが出来た。また、夏学期に履修した「台湾の歴史と文化」の講義で二二八事件について知っていたが、実際に記念館や慰霊碑を訪れ、改めてこの事件の悲惨さを実感し、考えさせられるものがあった。台湾を知る上で外せない国立台湾博物館を見学でき、大変勉強になった。

中正記念堂

文責 3年 酒井 響

【日時】2016年 8月6日(土) 14:00~16:00

【場所】中正記念堂

【概要】

中正記念堂(右写真)は、中華民国の初代総統である蒋介石を顕彰する施設であり、「中正」とは蒋介石の本名である。25万平方メートルにわたる広大な土地に建設されており、かつては軍用基地としても使われていた。本堂の中には蒋介石の像があり、「理論・民主・科学」という蒋介石の掲げた理念が書かれている。



当日の流れとしては、まず一階の蒋介石に関する展示をガイドさんに説明していただきながらまわった。15時前になると、4階の蒋介石の像(右下写真)へと向かい伝統的な儀仗隊の交代式を観た。その後、本堂の前で写真を撮るなどし、中正記念堂を去った。

【勉強会との関連】

勉強会では、戦後の台湾の歴史として中国国民党の台湾統治を勉強した。その中で蒋介石は最も重要な人物であった。勉強会において、中正記念堂の見るべきポイントとして①建築 ②蒋介石について ③儀仗隊の交代式の三つを掲げた。①については中国北京にある天壇を模して作られた本堂を見ることができた。②については1階の展示で蒋介石の実際に乗っていた車や、結婚式当時の写真など、実際に訪れなければ見ることができない貴重なものを見学できた。③の交代式については15時からの式を見ることができた。事前に勉強会をしていたためにどのような点に着目して見ればよいのか、目的意識を持って見学できたために、短い間であったが大変有意義な活動ができた。



【感想】

勉強会をしていく中で、国民党政府の汚職や犯罪、そしてその後続く二・二六事件、白色テロなどを知り、国民党政府や蒋介石に対しあまりいいイメージを持っていなかった。しかし、実際に台湾を訪れ様々な話を聞き、蒋介石が今の台湾における経済的発展の礎を築いたのであり、その功績を評価されているのも確かであると知った。だからこそ、中正記念堂のような立派な建築物を作られたのだと肌で感じる事ができた。今回の自分のように国民党政府＝悪という偏った歴史の見方ではなく、現地へ赴くことで多面的な見方ができて非常によかった。

安平古堡

文責 1年 山田 真由

【日時】2016年8月7日(日)13:00~14:30

【場所】台南市安平古堡

【概要】

当日は日本の新幹線技術を初めて輸出し現地に導入した台湾高速鉄道に乗って台北から約1時間半かけて台南へと移動した。安平古堡ではまずオランダ勢力を台湾から一掃し、安平古堡を拠点に台湾史上初めて漢人として政権を開いた鄭成功の彫像と古堡石碑、台湾文化300年を記念して日本が安平古堡を再建したときに移転された古砲を見て回った。その後1945年に城周辺の動きを監視するために建設され、1975年に新たに設置された展望台に上り、四方向から台南市の様子を見学した。また1930年に税関として日本人によって建てられ、1975年に改修が行われた洋風建築である史跡記念館を訪れ、オランダ統治時代から現在に至る安平の歴史の資料などを見学した。

【勉強会との関連】

安平古堡はオランダ統治時代にゼーランディア城という名で東インド会社の拠点および台湾統治の中心として、少ない人員で効率的にイギリス、スペイン、ポルトガルなどの外敵に備える必要性和従来服従関係の中で生活をしてこなかった先住民や中国からの移民の反発に対処する必要性から建設された城塞であるということを事前勉強会において学んでいたため、実際の城が残っていない状態であっても赤煉瓦による防衛的な都市作りを行っていた様子を感じ取ることができた。また当日見学した古堡石碑には「安平古堡」と記されていたが、実際には元々1928年にオランダ人に対して関税の撤回を要求した日本の浜田弥兵衛の功績をたたえる「贈従五位濱田彌兵衛武勇趾」という言葉が記されており、戦後現在の形に彫りなおされたことを勉強会で学んだ。

【感想】

台南を訪れる前の行程ではハイテク産業の企業訪問や、日本統治下の台湾など比較的近代の台湾を見てきていたため、安平古堡ではそれまでとは逆に歴史の重みを感じられる台湾を見ることができ新鮮であった。現在では台北に注目の集まることが多いが、台南は台湾全体を発展させる礎を築いた重要な地であったことを再認識することができた。安平古堡は清朝による台湾統治時代以降荒廃が進んだが日本統治時代に再建されているため、台湾で最も古い要塞でありながらも近い存在に感じた。度重なる改修によりオランダ統治時代の史跡がわずかしか残っていないことは非常に残念に感じられたが、一方で約300年の中でオランダ、清、日本と統治者が変遷しているにもかかわらず文化が断続的に続いていくのではなく、重層的に折り重なって作られていた点に魅力を感じた。台南の安平古堡見学はまさに8月7日のテーマであった「エキゾチック」にふさわしく異国情緒あふれる雰囲気を感じ取ることができた貴重な見学であったと同時に、近代に至るまでの間、台湾がどのような歴史をたどってきたのかを学ぶことのできるよい機会であったと感じた。

国立成功大学キャンパスツアー

文責 1年 阪口 雄基

【日時】2016年8月7日(日) 15:00~16:40

【場所】国立成功大学内

【概要】同日の安平古堡視察後、国立成功大学を訪問。国立成功大学の陳先生に大学を案内していただいた。国立成功大学は道路を挟み10のキャンパスに分かれているが、案内していただいたのは光復キャンパスと力行キャンパスであった。

国立成功大学は台南に位置し、台湾の民族的英雄である鄭成功にちなんで名付けられた台湾の国立総合大学である。日本統治時代の1931年に台



湾総督府の所管する台南高等工業学校として開校し、数度の改称、改編の後、1971年に国立成功大学と改称し現在に至る。終戦後国民党が接収した近隣の旧日本軍の軍事施設、用地も現在では国立成功大学の一部となっており、キャンパス内には旧陸軍の事務所（右上写真）や病棟、宿舎などの建造物がそのままの状態に残されている。1923年の当時皇太子であった昭和天皇の台湾行啓の際の記念に植樹されたガジュマルの樹（右下写真）も、戦後伐採されずに保全されている。これらのものを今回視察することができた。

【勉強会との関連】

遠征前の勉強会で日本の台湾統治の特徴の一つに、教育の重視が挙げられていた。また、台湾という国が比較的親日的であることにも触れられていた。戦後日本による統治が終わってからも数多くの日本の統治時代の陸軍の建造物や日本の支配の象徴ともとれる天皇の植樹なされたガジュマルの樹などが残されていることはこれらのことを証明している。



【感想】

自然豊かで、かつ広大なキャンパスであった。キャンパスツアーは日曜日に行われたため、人影はまばらで広いキャンパスがより一層広く感じられた。国立成功大学は歴史的に日本とのかかわりが非常に深い大学であり、遠征前の勉強会で台湾の歴史的背景を学んだ上に陳先生のガイドも加わったキャンパスツアーであったため、短い時間ではあったが非常に有意義なものになった。

赤嵌楼

文責 1年 渡部 龍生

【日時】2016年8月7日(日)16:20~17:40

【場所】赤嵌楼（台南市）

【概要】

台南市に位置している赤嵌楼（右写真）は、オランダによる台湾統治時代に発生した漢人の厳しい統治に対する不満の爆発（郭懷一事件1652年）後に、この事件の再発防止を目的に建築されたものである。プロヴィンティアと称された。のちに鄭氏が台湾を支配するようになると、ここに承天府を設置して、当時の台湾全島の最高行政機関となった。また、清朝支配時期の反乱を記念する石碑、日本の台湾統治時



期の台南市長の像もあった。ただし、この建物は戦後手が加えられたものである。当日は各班で自由に見て回った。

【勉強会との関連】

勉強会では、オランダ統治時代にオランダが、現地民の反抗のため台湾に対し防衛的な都市づくりを強いられたことを学んだ。その防衛的な都市の拠点を視察することができた。また、館内には船の模型などもあり、勉強会で「プロヴィンティアは東インド会社の事務所、宿舎、倉庫としての役割をもった」と学んだように、東インド会社との関連も目で見て感じることができた。さらに、これも勉強会で学んだことだが、台湾の支配層がオランダから鄭氏に代わることにに関して、オランダ人が鄭成功に降伏している像なども見ることができ、文字だけでは感じることのできない、台湾の人々が鄭成功の征服をどう感じているかなど、目で見て感じることができた。

【感想】

赤嵌楼は滞在していた台北やそれまで視察してきた施設と比較すると色使いや建物の構造（レンガ造り）などが独特で、当時のオランダと台湾の文化的な違いが目に見えて理解できた。また、同時に、事前勉強の段階では赤嵌楼は「オランダ統治時代にオランダが防御施設として建設したもの」と認識していたが、実際に見てみると、上の概要で述べたように、清朝支配時代の反乱を讃える石碑であったり、日本統治時代の台南市長の像があったりと、赤嵌楼は台南の歴史全般を表彰している建物であるということも知ることができ、有意義なものであった。



III. 班別行動報告

班別行動①

文責 1年 笠原 凜太郎

【日時】2016年8月8日(月)8:30~15:30

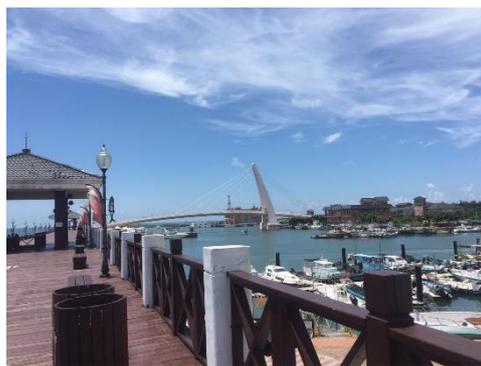
【場所】淡水

【概要・勉強会との関連】

最終日は丸一日班で行動するという事で班員一同前日、さらに遡るなら遠征に行く前の日本にいる頃からも真剣に話し合いをして行く先やタイムスケジュールなどを決定していた。そこで私たちの班が行くことになったのは淡水という場所であった。

淡水は台北から約25kmで、我々が泊まっていたホテルの最寄り駅である台北車站駅から電車で約40分の距離にあり台北の北端部に位置する。この地域はもともと原住民である平埔族ケタガン族が住んでいたがのちにスペインに占領され、次のオランダ統治時代には紅毛城が建設された。そして鄭氏王朝を経て日本統治時代には漁村になるなど台湾が植民地化されていく歴史の中での重要な情報が有形物として残っている貴重な地域である。

我々はまず淡水駅を降り、目指すべき情人橋のある漁人碼頭という港に向かって海沿いに歩き出した。向かって右側にはお土産屋から食事を食べる場所など様々な建物が連なり、左側は奥に小さな山を一望できる美しい水の景色が広がっていた。しばらく歩いていると建物も少なくなっていく静かな水の音が聞こえてきた。そして煉瓦造りの家や建物が姿を現しどこか異国情緒な雰囲気を醸し出しているかのようだった。さらに歩いていくと渋い赤茶色の建物が見えてきた。これが有名な紅毛城であった。もともとはスペインによって建設されたサン・ドミンゴ要塞をオランダが紅毛城に再建し今に至る。昔漢人がオランダ人を紅毛人と呼んでいたこともあって紅毛城と称されるようになったのだ。この紅毛城は通ってきた道沿いに立つ建物やこの周りに立つ建物ともどこか違う世界を作り出していた。まさに西洋風と言って良いだろう。そして潮風を感じながらついに漁人碼頭に到着した。右の写真からわかるのは船が多いということである。奥に見える橋が情人橋であるがそこに向かうまでに見える景色はまるで西洋の港であり、それが台湾のベニスと呼ばれる所以であると理解した。



【感想】

淡水を歩いてみて台北からたった25kmという距離なのに台北とは全く違い歴史的建造物だけでなく民家や店自体もとても古く感じられた。また日本統治時代というよりもその前の西洋の町並みをそのまま保存しているというふうに感じられた。台湾を7日間で学ぶということで多くは博物館や記念堂など歴史文化的な建築物や展示物を見てきたが、一方

で淡水は建築物だけでなく自然という形でも台湾の歴史を映し出していて、非常に台湾を理解する上で良いものだったと感じる。

班別行動②

文責 3年 岡田 健吾

【日時】2016年8月8日(月) 8:30~15:30

【場所】九份 (台湾北部)

【概要】

遠征最終日は班別で行動。我々の班は、新竹市(台北市に隣接する都市)の北部にある町、九份を訪れた。九份は台北中心部から30Km以上離れた町で、台北駅から車で1時間ほどの場所にある。5日間過ごした台北市の街並みとは打って変わって、長閑な地方村といった様子である。九份及びその周辺は東シナ海に面した山岳地帯であり、19世紀の終わりごろには金鉱が発見されて当時はゴールドタウンとして栄えた。その為、一時は多くの人が居住していたが、20世紀前半に金鉱脈が枯渇した後は、元の静かな町へと戻り今へと至っている。九份は山間の坂に作られた小さな町であり、山を通る車道に沿って商店が立ち並んでいる。更に、車道から幾つもの小道が伸びており、そこには飲食店や民家が密集している。

【勉強会との関連】

九份は台湾北部、つまり比較的日本に近い位置にあり、資料によると下関条約締結後、比較的早期に日本から師団が派遣され、統治されるに至ったようである。(参考：周婉窈著(2013)「台湾の歴史」平凡社98頁)

そして、台湾の他の都市と同様、日本統治期に道路網等の整備が行われており、九份は今なお当時の建築物を残している。実際、我々が訪れた際には当時作られた道路や坂道に設置された石造りの階段を確認することが出来た。(右写真)



【感想】

九份は、ビル街が立ち並び経済発展を感じさせる台北市とは全く異なる土地であった。周りを海・山に囲まれた町並みは、台湾の魅力の一つである「豊かな自然」を強く感じさせてくれた。高度が大きいためか爽やかな風が吹き、低緯度帯に属する台湾に在りながら過ごしやすい気候であった。一方で、町の一部は日本統治時代の家々・街道を保存しており、植民地支配の歴史を直に見ることができる興味深い場所でもあった。この度の遠征は7日間と短く、九州と同程度の広さがある台湾をこの期間で知り尽くすことは当然不可能であった。

しかしながら、6日目にオランダ統治期の名残がある台南を見学し、最終日に気候も町並みも都市部と大きく異なり、なおかつ旧来の建築物を残す九份を訪れたことは、台湾への多面的理解を深める上で大変意義があったと感じる。

班別行動③

文責 1年 吉田 大介

【日時】2016年8月8日(日) 8:30~15:30

【場所】国父記念館、台湾 101

【概要】

最終日は班別行動となり、我々の班はまず台北に位置する国父記念館を訪れた。辛亥革命を起し中国側からは「中国革命の父」、台湾からは「国父」として両国から敬われる数少ない人物である孫文の記念館である。中心にあるメモリアルホールには高さ8.9メートルにもなる孫文のブロンズ像(右上写真)が配置してあり、そこで衛兵の交代式を見学し、館内にある孫文の民主主義、自由思想に関する展示を通じて彼の三民主義及び諸思想が台湾において今日も受け継がれていることを学んだ。その後、2004年に世界一の超高層建築物として竣工された台湾101(中央写真)へ行き、台風の多い土地柄のために地震ではなく風に対して作られた耐震構造や、後述する超高速エレベーターなどを見学した。



【勉強会との関連】

日台関係についての勉強会で技術協力が重要であることを学んだが、国父記念館の後に行った台湾101で東芝製の最高速度分速1010メートルのエレベーターに乗り、オープン記念に総統がテープを切るような台湾の象徴的な建造物にも日本の技術が取り入れられていることを確認し、企業間の日台関係は良好であることを学んだ。また、そのほかにも台湾101本体の建造は熊谷組を中心としたJVによって行われ、当日移動の際に用いたMRTと呼ばれる地下鉄も東急建設(株)を中心とした日系企業がかかわっていて、台湾にとっては発展の補助、日本にとっては縮小していく内需の代替として今後も両国の良好な関係は互いによって望まれていると感じた。



【感想】

台湾に複数回行った祖母から台湾の街は非常に荒れていたものの最近では整備されとても綺麗になったという話を聞いていたが実際にその通りで、国父記念館付近には台湾 101 やそのほか高層ビルが林立し、台北の町並みは完全に近代都市のそれであり近年の発展の著しきが見受けられるものの、バスや徒歩での移動の際に時折過去の荒廃した台湾が見られ、経済発展の急速さ故に大きな貧富の差が生まれているのが容易に推測できた。今後の台湾の経済発展継続のためには格差是正のための社会福祉制度の充実のほか、Panasonic 台湾のような雇用の面で地域に根ざした企業の拡大が望まれると感じた。

班別行動④

文責 2年 佐々木 拓海

【日時】2016年8月8日(月) 8:30~15:30

【場所】龍山寺 (ロンシャンスー)

【概要】

この日は班別自由行動ということで、我々の班は「龍山寺」を訪れた。このお寺は清時代乾隆3年(1738年)に福建省泉州から渡ってきた漢民族の移民たちによって建立され、同じく福建普江安海龍山寺の分霊を迎え入れたものであり、歴史ある台北のパワースポットとして現地の人々からも愛されている名所である。また、我々の班には2、3日目に交流した国立台湾大学のマネージャーである Judy Lee が付き添ってくれたため、彼女を通じて現地の方からいろいろなお話を聞くことができた。その一つに境内を回るときのルールがあったのだが(境内は反時計回りに回る。3束の線香をそれぞれ別の神様に供えるなど)、これらのルールの中にはガイドブックには書いていないような細かな作法もあったため龍山寺についての理解をさらに深めることができた。

【勉強会との関連】

龍山寺は18世紀前半に漢民族が移住してきてから建てられたお寺であるため、高度な建築技術や厳かで華やかな装飾の数々は漢民族に由来しているということは、勉強会やグループでの事前学習を通して学習済みであった。そのため龍山寺を訪問した際にはそれらの特徴に注目し、学習した内容を間近で目にするという貴重な経験をすることができた。また、それらの建築や装飾のほかに台湾の独自の参拝ルールを組み込むことで龍山寺を台湾らしくしているという点においては、勉強会で学んだ「台湾という国は、他文化や外の技術の優れたところを吸収するのに優れた国である」ということとの関連を感じることもできた。

【感想】

龍山寺に到着後、荘厳な中国宮殿式廟宇建築の次に目に留まったのは、境内のいたるところでお経を唱える地元の人々の姿であった。40度近い猛暑のなか、文字通り熱心にお経を唱える彼らの姿は、台湾人の信仰深さと龍山寺への厚い信仰を私が実感するのに十分

であった。少なくとも日本においてはそのような光景は考えられないであろう。
また、我々の班には台湾人の **Judy Lee** が付き添ってくれたため、彼女との会話から台湾時の文化や価値観を垣間見ることができたほか、我々の英語力も向上するなど非常に有意義な時間を過ごすことができたように思う。何より、半日という短い時間ではあったが彼女との交流を深められて本当によかった。

IV. 全体感想

全体感想①

文責 4年 和田 幸菜

今回の台湾遠征は、私にとって前回のシンガポール遠征に続き2度目の遠征となったが、前回以上に有意義かつ充実感のあった遠征だったと感じている。それは、前回シンガポール遠征時の反省を踏まえた、意識の変化や事前準備の充実などが理由に挙げられると思う。

まず、今回の台湾遠征で最も記憶に残っているのは、国立台湾大学の学生との交流である。前回のシンガポール遠征では、自分の英語力の低さに気後れし、積極的にコミュニケーションを取れなかったという苦い経験があった。しかし今回は、事前勉強会でスピーキングの練習をした他、自主的に班員で集まり討論会に向けての念入りな準備を行った。そして何より、気後れせずとにかく積極的に話そう、という意気込みで討論会に取組んだ。結果として、英語には悪戦苦闘しながらも活発な議論を行うことが出来た。討論会以外でも、キャンパスツアーや夕食会でも相手校の学生と多く交流の場があったことで、前回よりも充実感を覚えた。

次に、この遠征は台湾と日本の関係性を再認識し、両国の関係性を考える良い機会になったとも感じている。特に、交流協会訪問での、沼田代表のお話しが心に残っている。今でも多くの台湾の人々が、日本統治時代に築いたインフラ・社会制度を今日の繁栄の基盤だと感謝している、とお話ししてくださった。実際、国立台湾大学の多くの学生が日本を訪れた経験があったり、日本語で親切に道案内してくださる人がいたり、台湾の人々の親日的な姿勢を肌で感じた。更に、企業訪問や国立台湾大学訪問、何をとっても私達を快く受け入れてくださり、ホスピタリティの心を感じずにはいられなかった。複雑な政治的問題の故、すぐ正式な国交を結ぶことは容易ではないとしても、このような民間レベルでの小さな交流を大事にしていくべきだと感じた。

また、この台湾遠征は自分にとっては将来への大きな刺激になったとも感じている。来春から社会人となる私にとって、如水会台湾支部、Panasonic 台湾、msi 訪問を通して、グローバルな世界で働く先輩方のお話を聞いたことは非常に刺激的だった。同時に、日本企業が世界に技術を輸出し、世界の人々の暮らしを支えていることを実感し、自分もそのようなことに携わりたいという想いがより強固になった。

今回の貴重な経験を自分の糧とし、自分の人生を豊かなものにすると共に、今後もこの海外遠征が一橋大学バレーボール部の伝統として継続するよう、微力ながら支援していきたい。最後に、今回の海外遠征を支援してくださった如水会の皆様、一橋大学バレーボール部OBOG会、この遠征に関わってくださった皆様に心から感謝したい。

全体感想②

文責 1年 渡邊 雄貴

今回の台湾遠征は、日本と地理的にも心情的にも近い台湾との、国際交流・文化学習を目的としたものであり、非常に内容の濃い7日間であった。その中でも、国立台湾大学バレーボール部との交流試合、討論会、企業訪問、交流協会台北訪問事務局の4つが私の中では特に有意義なものであった。

国立台湾大学バレーボール部との交流試合では、セレクションをしていて台湾の1部リーグで戦っている台湾大学の選手のプレーを見て学ぶことができた。台湾大学は高さとスパイク力があるとともにつなぎも上手く、これから3部で戦っていくうえで克服しなければならない課題を見つける一助となった。また、1,2年生主体のゲームでは実際にプレーをすることができ貴重な体験となった。

討論会においては、自分たちはAIについて英語で意見交換をした。これからさらに進歩していくAIについて、2045年問題や雇用の減少、法体制の不整備などの問題を共有しながら、学校教育や法律制定などの人間にしかできない役割を確認し、AIとの「共存」を進めていく方法を模索することができた。事前学習において知識を広げ意見をまとめていたが、実際に討論を行うことによって新たな考え方が提示され、より議論が深まった。同時に、自分の意見が英語で伝えることができない悔しい経験をしたので、物事の見分を広げるとともに意見を伝えられる英語力を身につける必要があることを痛感した。

企業訪問として、Panasonic 台湾とmsiに行った。日本企業で台湾を拠点にするPanasonic台湾では、家電だけに焦点を当てるのではなく、「地域に合わせた地域のための企業」というドメインを定義し運営しており、地域に適した需要のある商品を作ったり、雇用を生み出したり、環境活動に取り組んだりしていた。msiは純台湾企業であり、パソコン基盤で発展してきた企業である。だが、マザーボードなどだけを扱うだけでなく、数年前からゲーミングにも進出して多角化をした。企業訪問においては、大学の経営学概論で学んだドメイン戦略や多角化、PPMなどの考え方を活かしながら話を伺うことでより理解が深まった。

交流協会台湾事務所訪問では、沼田代表からお話をしてもらった。お話の中で特に印象に残ったのは、一般の人々の声が政治に影響を与え、3.11後の台湾からの支援に日本政府が正式に感謝できるようになったことだ。民衆の「それはおかしい」という疑問や怒りが政府の方針を変えさせ、それが日台関係の親密化につながったことに感動した。

今回の遠征で、台湾のトップレベルの学生と交流や、様々なお話を聞くことができたのはとても貴重な経験であった。この遠征は如水会やOB会、訪問先企業、国立台湾大学などの多くの支援と協力のおかげで行われたものであることを改めて理解し感謝するとともに、これからこの経験を生かしていきたい。

V. 如水会台湾支部訪問

如水会台湾支部夕食会

文責 3年 小林 稔啓

【日時】8月3日(水) 18:30~20:30

【場所】レストラン海霸王中山店

【概要】

如水会台湾支部による歓迎会は、4つの円卓に着席し、それぞれのテーブルをバレー部員7名、OB1名、如水会台湾支部の方2名ずつで囲みお話を聞くという形式であった。

まず、如水会台湾支部長の馬紹祥さん(昭和45年卒。台籍支部長)、松木洋さん(昭和60年卒。日籍支部長)からそれぞれご挨拶をいただいた。如水会台湾支部の支部会員は256名で、うち237名は台籍、19名は日籍であり、活動会員の増加に取り組んでいるとのことだった。

次に、朱戸平さん(平成5年帰国)から『台湾と日本のキズナ』というタイトルでプレゼンテーションをしていただいた。台湾が日本の植民地時代である時代に、嘉義農林学校が甲子園に出場するなど、日本が一方的に統治していたわけではないことを教えていただいた。一方で、台湾で生まれた日本人の湾生帰郷の問題もあり負の部分も確かに存在するということだった。経済関係においては、積極的な貿易を行っており重要な商業パートナーであるというお話だった。東日本大震災の際にも台湾の人々は日本の被災地に対して多額の義援金を送るなど、その友好関係を再認識できた。

我々のテーブルでは、安本祐さん(平成19年卒)と長島由典さん(平成18年卒)から台湾のマナーや台湾でのお仕事などの話をお聞きした。特に長島さんは台湾の鉄道関係の仕事に携わっているようで、とても興味深いお話だった。夕食会も終わりが近づき、まず一橋大学の校歌を全員で歌った。続いて、如水会台湾支部の方々及び現地参加のバレーボール部OBの方々からお話をいただき、現役の各学年の代表も一言ずつ挨拶させていただいた。OBの吹野博志さん(昭和42年卒)からは、一橋大学の現状についてグローバル人材育成に向けた取り組みに関するお話があり、私自身も機会をいただき3年生代表として今後のバレーボール部についてのお話をさせていただいた。

最後は記念撮影を行い、夕食会は終了した。

【感想】如水会台湾支部の方にこのような会を開いていただき大変貴重な機会となりました。特に、一橋大学の卒業生が世界で活躍していることを直に感じることができましたし、如水会のネットワークの強さも感じました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。



VI. 事前活動

吹野博志氏講演会

文責 2年 栗本 寛久

【日時】2016年5月11日（水）14：00～17：00

【場所】東一号館 1207 教室

【概要】

一橋大学バレーボール部 OB でありデル株式会社代表取締役社長・会長などを歴任され、現在は株式会社吹野コンサルティング取締役社長、株式会社オレガ取締役会長などを務めていらっしゃる吹野博志氏をお招きしてお話を伺った。吹野氏の豊富な知識とご経験からハイテク産業と台湾の発展とのつながりについてご教授いただいた。部員は事前に吹野氏から指定された2冊の図書、白石隆著「海の帝国」と中村隆英著「昭和史（上）」を読み、知識を全体で共有した上でミーティングに臨んだ。ミーティングの前半は吹野さんと台湾との繋がりについてのお話しから始まり、台湾の歴史と関連させながら台湾ハイテク産業の発展のプロセスについてのお話をしていただいた。後半は吹野さんから最初に台湾ハイテク産業に関連した問いが提示され、それについてまず部員たちが考え、その後でその答えとなる内容とそれに関連するお話をしていただいた。時折、吹野さんが部員を指名して意見を求めたり、部員も自ら発言したりと活発で緊張感のある会であった。

【勉強会との関連】

このミーティングは以後行われるハイテク産業についての勉強会を行う上で大きな意義があった。なぜなら、このミーティングで台湾ハイテク産業の発展の歴史について学び、部員全体で共有でき、それが背景知識となって勉強会の内容のより深い理解へとつながったからである。また、台湾の歴史を振り返る中で国民党政権時代の政策などにも触れたため歴史文化の勉強会に臨むうえでも役立ったと思われる。

【感想】

今回の講演会でのお話は本やインターネットで調べただけではわからない、台湾のハイテク産業の発展を第一線で身をもって体験された吹野氏にしかできないものであり、その内容や話の切り口は私にはとても刺激的であった。また、その発展の理由が台湾国内の歴史にとどまらずアメリカや日本の社会状況・ハイテク産業構造の歴史とも関係しているという事実は、私にグローバルな視点から物事を考察することの重要性を改めて認識させてくれるものだった。そして、このミーティングは台湾遠征前に部員全体が集まり台湾について学ぶ初めての機会であったため、台湾ハイテク産業のついて学ぶということと同時に海外遠征担当ではない部員全体にも台湾遠征が始動しているということ意識させることが出来たという意味でとても有意義であったと感じた。

最後に、このミーティングを提案・企画してくださりお忙しい中、一橋大学にお越しいただき先に述べたお話をしていただいた吹野氏、またそれをバックアップしてくださった OB の方々にこの場を借りて感謝申し上げます。

VII. 參考資料

2016年5月30日

2016年度海外遠征計画書

一橋大学体育会バレーボール部

1. これまでの海外遠征

2010年度 豪州、2012年度 中国、2014年度 シンガポールに遠征。

2016年度 台湾に遠征を計画

2. 海外遠征の目的

近年、ハイテク産業を軸に急成長を遂げる台湾を訪れ、現地の学生と親善試合や討論会を行うことにより相互交流することで、国際的視野を広げ、国際人としての知見を得ることを目的とする。また、大学体育会運動部の一員として台湾を訪問することにより、単なる個人的な海外旅行では経験できない事柄（政府機関や先端産業等を視察すること）を実際に体験する。更にはバレーボールという共通基盤を通じ他国学生と交流を深めることで部としての活動の充実を図ることを目的とする。

3. 海外遠征参加者

- ・引率OB 1名
- ・新4年生 5名
- ・新3年生 7名
- ・新2年生 6名
- ・新1年生 11名

= 合計 29名

氏名等の詳細は添付別紙の通り。

4. 交流先

国立台湾大学 (National Taiwan University =NTU)

バレーボールチーム

5. 宿泊先

台北劍潭青少年宿舎 (8月2日～5日 3泊4日)

(No. 16, Section 4, Zhongshan N Rd, Shilin District, Taipei City, 台湾 111)

ニューコンチネンタル・タイペイ (8月6日～8日 2泊3日)

(No. 73, Section 1, Chongqing North Road, Taipei, Taiwan)

6. 実施年月日

2016年8月2日～8月8日 現地6泊7日を予定。

7.日程案・タイムテーブル

1日目 (8月2日 火曜)

11:00 羽田空港集合
14:15 羽田空港出発
17:15 台北・松山空港
NT 台北劍潭青少年宿舎到着

2日目 (8月3日 水曜)

AM NTU バレーボールチームと交流試合
PM NTU バレーボールチームと交流試合
NT 如水会台湾支部夕食懇親会

3日目 (8月4日 木曜)

AM NTU バレーボールチームと交流試合
PM NTU バレーボールチームと交流討論会
NT NTU バレーボールチームと懇親夕食会

4日目 (8月5日 金曜)

AM 台湾 Panasonic 工場視察
PM MSI 工場視察
NT 交流協会台湾支部訪問

5日目 (8月6日 土曜)

AM 故宮博物院見学
PM 国立台湾博物館見学・総統府外観視察
NT その他、台北市内の文化遺産（未定）を見学

6日目 (8月7日 日曜)

AM 台湾新幹線により台南へ移動
PM 台南市内・安平古堡・国立台南博物館視察
NT 台湾新幹線により台北へ移動

7日目 (8月8日 月曜)

AM 班別自由行動
PM 同上
16:00 ホテル集合後、全体で台北松山空港へ
18:15 台北・松山空港発
21:55 羽田空港着
解散

以上

収支報告書

一橋大学バレーボール部第四回海外遠征(台湾)収支報告書 平成 28 年 9 月 19 日

会計担当: 裏田

* 1: 現地での NTD 換算率: 0.3034

【収入の部】					
	項目	単価 (円)	数	金額(円)	備考
1	OBOG 会支援金			1,000,000	
2	如水会国際交流助成金			1,000,000	金額は未確定 (OBOG 会が立替)
3	参加者個人負担金(付添 OB を含む)	50,000	29	1,450,000	
	収入合計			3,450,000	
【支出の部】					
	項目	単価 (円)	数	金額(円)	備考
1	飛行機代・宿泊費等			2,735,309	
2	海外旅行保険費用	2,440	29	70,760	
3	現地交通費			350,869	
4	台湾大学との交流会費用			98,156	
5	現地訪問親善交歓品費用			59,446	
6	その他雑費(携帯電話レンタル費等)			76,704	
	支出合計			3,391,244	
	収支(次回への繰越金)			58,756	

国立台湾大学・一橋大学 交流日程表（一橋用）

文責 比屋根亮太・山浦拓

8/3（水）			8/4（木）			8/5（金）
時間	内容	場所	時間	内容	場所	場所
0900-0930	到着	Gym 1F	0900-0930	到着	Gym 1F	台湾 Panasonic・ MSI・交流 協会台北支 部訪問 (NTU 側の 監督と部員 一名も途中 まで同行)
0930-1000	アップ		0930-1000	アップ		
1000-1010	開会式		1000-1130	第三試合		
1020-1045	アップ (続)		1130-1200	シャワー		
1045-1200	第一試合		1200-1300	昼食		
1200-1400	昼食	NTU Sports Center 2F 247 room	1300-1400	キャンパス ツアー	NTU Campus	
1400-1430	アップ	Gym 1F	1400-1430	イントロダク ション	NTU Sports Center 2F 248 room	
1430-1630	第二試合		1430-1600	交流討論会	247 & 248 room	
1630-1700	シャワー		1730-2000	交流夕食会	捷絲旅 2F 義響食堂	

交流の主なタイムスケジュールは以上の通りです。

以下、試合や討論会について補足説明いたします。

・ 試合について（8月3日、4日）

第一試合～第三試合まで5セットマッチの試合

第一試合、第三試合はレギュラーメンバー、第二試合は新人（1・2年生中心）

・ 討論会について（8月4日 14:00～16:00）

14:00～14:30 自己紹介・イントロダクション

14:30～14:45 全体に対して一橋側が議題の内容について説明

14:45～15:15 各班で討論（5班のうち3班は台日連携、2班はAIについて）

15：15～15：30 各班で討論結果発表（3分×5班）

15：30～16：00 発表に対しての意見や質問を全体で話し合う。

・討論会テーマ

① アジア情勢：5班のうち3班がこれについて討議

(1) 台湾と日本が今後どのように連携していくか：日本から台湾・台湾からの日本の印象などの意見交換をし、歴史を見つつ、今後、経済・政治・文化の面でどのように連携していく

(2) 中国と台湾の関係について：政権交代後、中国と台湾の関係性はどうか変化していくのか、そこに日本が関連していくことはできるか

② AIについて：5班のうち2班がこれについて討議

AIが社会に進出する中で、人間とAIは共存することが出来るのか。いかに共存していくか（分業していくか）。

・交流会場（体育館）へのアクセス

MRT 公館駅から徒歩10分です。以下、キャンパスマップ  の体育館（総合体育館ではないのでご注意ください）

画像が細かく、見にくい場合は下記のリンクをご参照ください。

http://www.ntu.edu.tw/english/about/map/B_02_A.jpg

参加者名簿（一橋大学バレーボール部・国立台湾大学バレーボール部）

一橋大学体育会バレーボール部

	学年	学部	氏名	読み仮名	年齢
1	4年	経済	宇野 宏祐（主将）	ウノ コウスケ	23
2	4年	法	栗野 一輝（主務）	アワノ カズキ	22
3	4年	法	岡田 健吾	オカダ ケンゴ	22
4	4年	法	長尾 知樹	ナガオ トモキ	21
5	4年	社会	和田 幸菜（マネ）	ワダ ユキナ	21
6	3年	商	宮口 佑太	ミヤグチ ユウタ	21
7	3年	経済	酒井 響	サカイ ヒビキ	22
8	3年	経済	竹内 誠也	タケウチ マサヤ	21
9	3年	法	小林 稔啓（副将）	コバヤシ トシアキ	21
10	3年	社会	裏田 舜脩	ウラタ シュンスケ	21
11	3年	社会	山浦 拓（遠征リーダー）	ヤマウラ タク	20
12	3年	商	辻 佳奈子（マネ）	ツジ カナコ	21
13	2年	商	相川 泰輝	アイカワ タイキ	20
14	2年	経済	佐々木 拓海	ササキ タクミ	20
15	2年	法	平林 凜太郎	ヒラバヤシ リンタロウ	19
16	2年	社会	栗本 寛久	クリモト ヒロヒサ	21
17	2年	社会	住吉 瑞基	スミヨシ ミヅキ	19
18	1年	商	渡邊 雄貴	ワタナベ ユウキ	18
19	1年	経済	阪口 雄基	サカグチ ユウキ	19
20	1年	経済	吉田 大介	ヨシダ ダイスケ	18
21	1年	法	今井 優貴	イマイ ユウキ	18
22	1年	法	吉田 陽	ヨシダ アキラ	19
23	1年	社会	石田 龍	イシダ リョウ	18
24	1年	社会	笠原 凜太郎	カサハラ リンタロウ	19
25	1年	社会	比氣 朋訓	ヒキ トモノリ	19
26	1年	社会	渡部 龍生	ワタナベ リュウセイ	19
27	1年	商	旭 麻衣（マネ）	アサヒ マイ	19
28	1年	商	山田 真由（マネ）	ヤマダ マユ	18
29	付添 OB	一橋バレー ボール クラブ	宗田 雅彦	ソウダ マサヒコ	64

国立台湾大学バレーボール部

Name	English name	Major	Grade	Height	Position	Number
李則穎 (captain)	Tse-Ying Lee	Department of Medicine	2	174	S	5
林炫宇	Hsuan-Yu Lin	Department of Agronomy	3	175	S	7
蔡政儒	Chang-Ju Tsai	Graduate Institute of Mechanical Engineering	1	180	S	20
黃柏勳	Bo-Shiun Huang	Graduate Institute of Applied Mechanics	8	173	S	14
陳昭銘	Chai-Ming Chen	Department of Bio-industrial Mechatronics Engineering	2	189	WS	18
蔡佳昇	Chia-Sheng Tsai	Department of Anthropology	3	184	WS	10
郭佑澤	Yo-Tse Kuo	Department of Agronomy	3	175	WS	4
林柏均	Po-Chun Lin	Assistant Manager of Department of Agronomy		181	WS	9
呂紹瑀	Shao-Yu Lu	Department of Civil Engineering	1	180	WS	12
洪紹鈞	Shao-Chun Hung	Department of Electrical Engineering	2	187	MB	13
呂姜耀凱	Yao-Kai Lu-Chiang	Department of Civil Engineering	4	194	MB	2
陳昱嘉	Yu-Chia Chen	Graduate Institute of Applied Physics	1	182	MB	11
殷豪	Hao Yen	Department of Information Management	3	180	MB	1
張智傑	Chih-Chieh Chang	Graduate Institute of Linguistics	4	180	WS	6
史瀚陽	Han-Yang Shih	Graduate Institute of Library and Information Science	2	175	WS	16
曹仲偉	Chung-Wei Tsao	Department of Agronomy	1	175	WS	8
比屋根亮太	Ryota Hiyane	Graduate Institute of politics	6	174	L	19
李楚翹	Chi-Chiao Lee	Graduate Institute of Linguistics	1	185	L	3
胡林煥	Lin Huan Hu	国立台湾大学体育室			助教授・監督	

討論会プレゼンテーション資料①

Theme 1 Japan-Taiwan relations

Basic Stance of Japan toward Taiwan

- Japan does not accept Taiwan as an official country
- Japan-Taiwan relations are substantially the same as those between official countries

Active Exchange of People and Culture

Contents	Year	
Taiwan→Japan The Number of Visitors	2015	3,677,075 (Year-on-year 29.9%)
Japan→Taiwan The Number of Visitors	2015	1,629,193
The number of students from Taiwan	2015	7,314 (Year-on-year 17.4%)

Foundation of good public opinion
→Japan and Taiwan are basically in close and good relations

Important Economic Partner

- Japan is the second largest trading partner for Taiwan
- Taiwan is the fifth largest trading partner for Japan
- Total direct investment to Taiwan
→ About 200 million dollars
- Total direct investment to Japan
→ About 164 million dollars
- export the products of their own strong fields, such as electrical equipment, to each other

Taiwanese Domestic Politics

- Regime change from Nationalist Party to Democratic Progressive Party
- The new administration has set up a Japan-US-oriented policy
→Growing expectations for closer Japan-Taiwan relationships

Democratic Progressive Party		Nationalist Party
Taiwan is one of the independent countries	Basic Stance of Taiwan	Taiwan is part of China →Opposition to Taiwan Independence
Willingness of mutual cooperation	Relations with China	Aim to foster a mutual trust

Question

- Should Japan and Taiwan cooperate in their field of strength, high-tech industry, to develop new technology?
- What can we do to make the tourism industry become an even more important source of income for the country?
- What do we need to build better relation?

Reference

- http://go-taiwan.net/phocadownload/2015_statistics_by_month.pdf
- [https://www.konyu.or.jp/e23_contents.nsf/15ae977a6d6761f49256de4002084ae/147d413a66547aff49257b160022a9c3/\\$FILE/2015datatabook.pdf](https://www.konyu.or.jp/e23_contents.nsf/15ae977a6d6761f49256de4002084ae/147d413a66547aff49257b160022a9c3/$FILE/2015datatabook.pdf)
- http://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/ca6g7e0000027zc0-att/since2003_tourists.pdf.pdf
- http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student/_icsFiles/afieldfile/2016/03/30/data15_brief.pdf

討論会プレゼンテーション資料②

THEME2 ARTIFICIAL INTELLIGENCE

THE DEFINITION OF "AI"

- AI stands for **A**rtificial **I**ntelligence
- There is no clear definition of AI
→ Basically refers to "the same kind of intelligence as human beings"

WHAT WE CAN EXPECT IN "AI"

- Medical care
Make an accurate diagnosis on the basis of the enormous medical books



WHAT WE CAN EXPECT IN "AI"

- self-driving
- Tell the difference of the type of vehicle
- Tell whether parking automobiles are trying to start



WHAT WE CAN EXPECT IN "AI"

- Pepper(robot developed by SoftBank)
- Equipped with "emotional engine"
→ Read and share the feelings of the people



2045 PROBLEM

- It is expected that the computer will exceed the intelligence of human in 2045
- AI will be responsible for All subsequent invention rather than a human being
- Subsequent progress is unpredictable

- The future that human beings are no longer necessary may come...

- With an understanding of the current situation and the possibility of AI, we must take advantage of it

QUESTION

- How can AI play an important part?
- Is it possible for human to control AI?
- Can AI fit itself to human beings' society?
- What are the things that can't be made by AI?
What can human beings do?

一橋大学体育会バレーボール部プレゼンテーション資料

Presentation Sheet (26,September2015)

・ About HITOTSUBASHI University



Hitotsubashi University, founded in 1920, is one of the leading national universities in Japan. The campus is located in Kunitachi city, in western part of Tokyo. The university is famous in the social sciences and has four departments –commerce, economics, law and sociology. A lot of graduates have been quite active in various fields of business world of not only Japan but also other countries.

Hitotsubashi University has been developing international exchanges with other universities abroad and cooperating with 96 universities in the world. At present, more than 500 international students are studying at Hitotsubashi university.

・ About Hitotsubashi University history

Hitotsubashi University began as the Commercial Training School established privately in 1875. For the progress of industrialization in Japan and the expansion of its foreign trade, the status of this school was raised and renamed the Tokyo Higher Commercial School. Tokyo Higher Commercial School contributed to Japan's economic growth, and due to this achievement, the Tokyo University of Commerce



was finally established in 1920 as the highest institution of commercial education in the country. After WWII, this university was reorganized as a four-year university in 1949, adopting the name of Hitotsubashi University.

- About the Men's Volleyball Team



Hitotsubashi Men's Volleyball team was born in 1932, and has over 80-year history. At present, the team is composed with 21 players and 5 supporting staffs.

Our present ranking in the Kanto university men's volleyball league, which is organized with more than 100 teams in Kanto region, Japan, is approximately 40th. This volleyball league has been held twice a year (spring and autumn) with long history in Japan.

- About Friendship match with foreign universities

Our Men's volleyball team has held friendship matches and cultural exchanges with overseas universities once every two years. We have visited Australia in 2010, China in 2012 and Singapore in 2014.

The visit to Perth in Australia in 2010



We have visited the University of Western Australia (UWA) in Perth for having volleyball games with UWA volleyball team, and have exchanged information on university life mutually.

The visit to Beijing in China in 2012



We have visited the Renmin University of China in Beijing for having volleyball games with Renmin University volleyball team and have had discussions on various issues with them, on not only volleyball but also other cultural issues.

The visit to Singapore in 2014



We have visited the National University of Singapore (NUS) for having volleyball games with the NUS volleyball team, and have had discussion on the differences of university life between Singapore and Japan. We have also visited Yale-NUS College and exchanged various information on mutual culture.

Plan to visit Taiwan in 2016

We are now planning to visit Taiwan in the summer, 2016, to have a friendship match of volleyball game with a good university in Taiwan, and would like to have discussions on mutually interesting issues if possible.